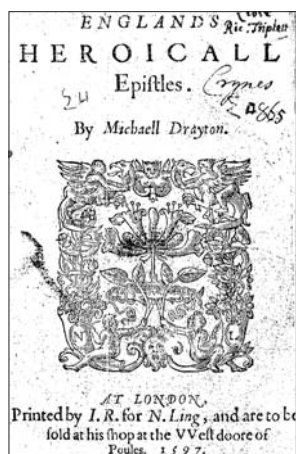


『ヘンリー二世』 研究

— 史実を物語る：マイケル・ドレイトン

『イングランド英雄の書簡』 —

國 崎 倫



1. はじめに

1653年9月9日、モーズリー (Master Mosely) によってロンドン書籍商組合に『ヘンリー一世とヘンリー二世 シェイクスピアとダヴェンポートによる』と銘打たれた戯曲の原稿が持ち込まれ、登記簿への登録を済ませた。この戯曲のテキストは現存しないが、二つの作品が材源となった可能性は認められている。ひとつは1612年に出版されたトマス・デロニーによる恋愛詩、「美しいロザモンドの死」

であり、もうひとつが1597年に出版されたマイケル・ドレイトンによる『イングランド英雄の書簡』(Michael Drayton, *England's Heroical Epistles*) である。ドレイトンは、恋人と離れて暮らすことの恨みつらみや恋人が戻ってくるように願う思いなどを綴ったオヴィディウスの『名婦の書簡』(*Epistulae Heroidum*) からの影響を受けて、本作品を書いたとされている。

ドレイトンにより新たに二行連句として編まれた『イングランド英雄の書簡』(以下『書簡』と略記) には、ジョン王とマチルダ、ヘンリー4世とジェー

ン・ショアなど12組の恋人たちが交わす書簡が収められている。ここに含まれる「ロザモンドからヘンリーへの手紙」、「ヘンリーからロザモンドへの手紙」において、国王と愛妾が互いに寄せる心情が生々しく告白されており、ドレイトンはデロニーの恋愛詩とは全く異なる恋人たちの姿を描いた。本稿では、ドレイトンの作品をデロニーの作品と比較考察することで、同一のモチーフが時系列において被る歴史的解釈の変化を確認する。

2-1. ロザモンドの告白

ヘンリー二世とロザモンドのモチーフは、多くの絵画が物語るように、悲恋として解釈され需要を得ることが主である。デロニーによる恋愛詩は、国王と愛妾を美化して中世の騎士道精神、宮廷風恋愛を彷彿とさせる内容であった。その最たる描出として、戦へ向かうヘンリーに対し、小姓のように同行して身の回りの世話をするというロザモンドの申し出は、献身的な愛を表現していた。

しかし、デロニーの恋愛詩よりも早く1597年に出版された『書簡』に含まれる「ロザモンドからヘンリー二世への手紙」(The Epistle of Rosamond to King Henrie the second)においてドレイトンは、ロザモンドの国王に対する非難、世間体への配慮、家名を汚したことへの後悔と謝罪という三点に焦点を絞っていたのである。ここでロザモンドが国王の愛妾となった事実を“my shame”と何度も悲嘆する様子は、作品の特徴となっている。この点において『書簡』は、オヴィディウスの『名婦の書簡』とは主旨が異なっていたと言える。

まず『書簡』においてロザモンドは、権威で愛妾を黙らせて不義の悦びを獲得する国王ヘンリーに対し、後悔と怨恨を訥々と語り、その狡猾さを責める。

As this pure ground, wheron these letters stand,
So pure was I, ere stayned by this hand;
Ere I was blooted with this foule offence,

So cleere and spotlesse was mine innocence:
Now like these marks, which taint this hatefull scroule,
Such the black sinnes, which spotte my leprous soule.
O Henry why, by losse thus shouldst thou winne?
To get by conquest? To enrich with sinne?
Why on my name this slaunder doost thou bring,
To make my fault renowned by a King?
Fame never stoopes to things but meane and poore,
The more our greatnes, makes our fault the more.
Lights on the ground, themselves doe lessen farre,
But in the ayre, each small sparke seems a starre.
Why on a womans frailetie wouldst thou lay
This subtile plot, mine honour to betray?
Or thy unlawfull pleasure should'st thou buy
With vile expence of kinglie maiestie?

(SigB 1^v, ll7-24)

ロザモンドは肉体と魂に被った穢れを「忌まわしい罪」と呼び、疫病に罹患して爛れ染みのついたようだと言明する。罟を仕掛けられ迷宮に幽閉されるロザモンドの屈辱を世に語ることは、ヘンリーの勝利と征服欲を豊かに満たすものだ。戦へ赴くヘンリーの無事を願う場面は確認できず、デロニーが描いたような悲恋のロマンスへ傾倒する気配は、『書簡』には存在していなかったことがわかる。

次にロザモンドは、世の既婚女性から注がれる冷酷な眼差しに耐えきれず、弁解を試みている。

I clymbe the top of Woodstocks mounting towers,

Where in a Turret secretly I lye
To viewe from farre such as doe travaile by,
Whether (mee thinks) all cast theyr eyes at mee,
As through the stones my shame did make them see,
And with such hate the harmless walls doe view,
As unto death theyr eyes would mee pursue.
The married women curse my hatefull life,
Which wrong wish I buried quicke may die,
The loathsome staine to their virginitie.
Well knew'st thou what a monster I would bee,
When thou didist builde this Labyrinth for mee,
Whose strange *Meanders* turning every way,
Be like the course wherein my youth did stray:
Onely a Clue to guide mee out and in,
But yet still walke I, circuler in sinne.

(B 2^o, 4-19)

愛妾ロザモンドの艶やかな色彩は衰え、その美を覆うように影を落とす疲労と絶望が描かれる。ここでロザモンドはウッドストックに建てられた迷宮にてひとり、外界を眺めている。世間が自らを「塔に幽閉された怪物」と見ていることを認識しており、死を切望している。彼女は愛妾となる人生を拒んだが、無力であり、今では以前の生活に戻ることも叶わず、苦境は彼女を閉じ込める迷宮に喩えられている。他に選択肢が無かった人生を、出口の見つからない複雑な迷路に喩え、正妻になることが許されず庇護者からの寵愛に依存せざるをえない立場は、外界へと導く頼りない撚糸に相当する。国王が不在のためにロザモンドの世話と管理はトマス・ボーガン卿に任されており、解けることのない罪の輪の中に幽閉される不運を彼女は嘆いている。さらに以下の引用は、ロザ

モンドの実家の両親へ対する謝罪である。

Rose of the World, so dooth import my name,
Shame of the world, my life had made the same;
And to the unchaste thys name shall given bee,
Of *Rosamond*, derived from sinne and mee.
The *Clyffords* take from mee that name of theirs,
Famous for virtue many hundred yeeres.
They blot my birth with hatefull bastardie,
That I sprang not from their Nobilitie;
They my alliance utterly refuse,
Nor will a strumpet shall their name abuse.

(B 3^r, 23-32)

ロザモンドは、「この世のバラ」ではなく「この世の恥」となったことで数百年続く家名を汚したことを詫びている。「一門は私を庶子とみなすだろう。娼婦となった私の出自を名高いクリフォード家から外してほしい」という言葉には、孤独が滲み出ている。

ドレイTONはデロニーと異なり、ヘンリー二世への非難、世間体への配慮、ロザモンドの後悔と謝罪を描いた点で独自性をすでに示していたことが明らかとなるが、その文体には既知の情報を反復する癖がある。例えば、ひとつのスタンザにおいて“sin”、“spot”、“mark”、“foul”、“taint”など素朴で易しい語が並んでおり、『書簡』においてはすべて同義である。属性に言及しつつ言葉を変えて同じ内容を繰り返すのは古英語・中英語作品などにおけるヴァリエーションの作法であるが、物語の展開は停滞し、連続して湧き上がるイメージの豊かさを欠いてしまう傾向がある。国王と愛妾の退廃的主従関係の告白と文体が影響したのであろうか、1597年にドレイTONが語ったロザモンドの嘆きと弁明

は、1612年に印刷されたデロニーの恋愛詩で削除されてしまい、以降、17世紀末に現れるジョン・バンクロフトの戯曲や18世紀に匿名で出版される小説など、ヘンリー二世関連印刷物において再び現れることはないのである。

2-2. ヘンリーの嘆き

『書簡』におけるヘンリー二世は年老いている。ホリンシェッド『年代記』は、その体躯の良さと愛人の多さに言及し、デロニーは不遇に耐える二人の恋人の悲恋を歌った。しかしドレイトンは、国王の老齢に伴う病と精神虚弱、愛妾との年齢差を明確にした点で、異なる史実を語ろうと試みていた。

'Henry to Rosamond'
And by the pride of my rebellious sonne,
Rich Normandy with Armies over-runne?
Fatall my birth, unfortunate my life,
Unkind my children, most unkind my wife.
Griefe, cares, old age, suspition to torment mee,
So manie woes, so many plagues to finde,
Sicknes of body, discontent of minde;
Hopes left, helps rest, life wronged, joy interdicted,
Banisht, distressed, forsaken, and afflicted:
Of all releefe hath Fortune quite berest mee?
Onely my love unto my comfort left mee.

(C 1^v, 9-19)

ヘンリーは君主として生まれた運命を嘆き、親子の情を欠いた息子リチャード、冷酷な正妻エレノア、老齢に伴う肉体の病と精神衰弱から生じる絶望を吐露し、ロザモンドが唯一の救済であると依存している。これらの情報は当時、周知で

あるために言及する必要が無かったのか、物語の雰囲気や邪魔する要素として意図的に排除されたのか、プランタジネット朝初代イングランド国王の老いを敢えて真面目に語ろうとしたのはドレイTONの『書簡』のみであろう。

Of earthly blessing robbed and dispossess,
Let me be scorned, rejected, and reviled,
From kingdome, country, & from Court exiled,
Let the worlds curse upon me still remaine,
And let the last bring on the first againe;
All miseries that wretched man may wound,
Leave for my comfort; onely *Rosamond*,
For thee swift Time her speedy course doth stay,
At thy command the Destinies obey;
Pitty is dead, that comes not from thine eyes,
And at thy feete even mercy prostrate lyes;
If I were feeble, rhumanticke, or cold,
These were true signes that I were waxed old,
But I can march all day in massie steele,
Nor yet my armes unweeldie weight do feelee,
Nor waked by night, with bruze or bloudy wound,
The Tent my bed, no pillow but the ground;
For very age had I layne bedrid long,
One smile of thine againe could make me yong.

(C 2, 1-19)

かつての強靱で恰幅の良い国王の威厳は陰り、強がってはいるものの、鎧兜の重みに耐えながらの凱旋は軽やかとは言いがたい。堅く冷たい地面で眠る戦の野

営にも嫌気がさしている。老いと死を意識して、「追放されてもかまわない、王冠をくれてやるから、ロザモンドだけは奪わないでくれ。彼女の微笑みだけが私を若返らせてくれる」と語るのは、ロザモンドへ寄せる愛ゆえではない。

『書簡』におけるヘンリーには、彼女が抱える世間体への配慮、後悔と謝罪など想像もつかないのである。

4. 結 論

ヘンリー二世と愛妾ロザモンドというモチーフが時系列において被る歴史的解釈の変化を辿ると、1597年に出版されたドレイトンの『書簡』は、老齡ヘンリー二世と若きロザモンドの年齢差を背景として、ロザモンドの国王に対する拒絶、名誉を奪われて家名を汚されたことへの怒りと後悔と謝罪、愛妾としての運命を悲観して嘆く姿を物語ることに努めた。ドレイトンはオヴィディウスのスタイルを継承したが、恋人と離れて暮らすことの心痛や恋人の帰還を切望する内容ではなく、権力者への嫌悪と怨恨をロザモンドに代わって告白した。華やかさに惑わされることのない朴訥なドレイトンの貢献は、15年後に登場するデロニーの華美な恋愛詩によって塗り替えられてしまう。ドレイトンの描いた史実が、後に再版を繰り返したという痕跡は見受けられないのである。

参考文献

Anon. *The Unfortunate concubines: or, The history of fair Rosamond, mistress to Henry the Second, and Jane Shore, concubine to Edward the Fourth*. Place of publication not identified: Hollis, between 1700 and 1799.

Bancroft, John. *Henry the Second, King of England, with the death of Rosamond a tragedy, acted at the Theatre-Royal, by Their Majesties servants*. London: Printed for Jacob Tonson ..., 1693.

Deloney, Thomas. *Strange histories, or, Songs and sonnets, of kings, princes, dukes,*

lords, ladyes, knights, and gentlemen and of certaine ladyes that were shepheards on Salisburie plaine. London: Printed by R.B. for W. Barley, 1612.

Drayton, Michael. *Englands heroicall epistles.* London: Printed by I [ames] R [oberts] for N. Ling, and are to be sold at his shop at the vvest doore of Poules, 1597.

Holinshed, Raphael. *The Third volume of Chronicles, beginning at duke William the Norman, commonlie called the Conqueror...* London: printed [by Henry Denham] in Aldersgate street at the signe of the Starre, 1586. STC (2nd ed.) / 13569

Lost Play Database (https://lostplays.folger.edu/Henry_II)

